



図5 ITER機構 建設管理本部長 岡山克己氏。

ある。顧客満足度向上のため、あらゆる努力をせよ」という方針を掲げ、ともすれば個別最適に陥りがちなスタッフを叱咤激励しながらチームワークでここまでやってきた。ITERでは、スコープごとに業者と契約を結び、据付をしていく。このため、一つのエリアで複数業者が据付作業を行うことになり、業者間の連携調整が極めて重要である。我々がうまく機能しないと、例えばクレーンの吊下げ作業をしている下で別工程が組まれるといった安全上の問題が発生したり、ある会社が据付しようと現場に向かってみたものの、既に別会社が据付した機器が邪魔していて作業できないなどという事態が発生する。これまでは同時並行で行われる据付作業数も片手で足りるほどであったが、本格スタートにあたり益々多くの会社が一つのエリアで作業するような状況が予想され、我々の責任は一層重要になってきている。「起こりうる事象を可能な限り想定し、それに基づき行動する」を周知徹底し、今後の組立期間を乗り越えたいと思う。

当地でもCOVID-19の影響を受け、外出時のマスク着用など生活習慣に変化がみられる。図書関連業務は在宅勤務の導入が進んだが、組立現場では監督者も含め複数人での狭所作業が多く、対応に苦慮している。組立の本格スタートとCOVID対策、試練の秋となりそうである(図5)。

## 5. ITER機構インターンシップ体験記 (東京外国語大学 横山友泉)

ITER機構で広報部インターン生として過ごした10か月間は、私にとってかけがえのない非常に貴重な経験となった。

私は、ITER広報部において2019年10月から2020年7月までインターンシップを行った。以前から国際機関で働いてみたいという思いがあったこと、さらには大学での専攻であるフランス語を活かせるのではと思ひ応募した。

現地に赴いて、まさに多国籍の方々が当たり前のように協力して働いている環境に最初大いに戸惑った。課題を与えられるわけではなく、初日から自主性が試される状況であった。事前にITER機構のウェブを見て、社会



図6 インターン生とのクリスマスパーティーの様子  
(中央がビゴ機構長、左が私)。

に向けた情報発信や機構内での情報共有に弱い点があるように思っていたので、思い切って、その点を広報部ミーティングで発言した。学生からの視点は職員の皆さんには新鮮だったようで、自分が考えていることを実行してみても、とサポートしていただいた。ITER機構公式インスタグラムの運用を任せていただいたり、アメリカ人の広報部インターン生とともにITER NOWというシリーズ(<https://youtu.be/yzQMT7LhR5A>など)をYouTubeアカウントで配信したりしていく中で、部署内外の方から評価をいただき、着実に自分への自信へと繋がった。さらには、南フランスで開催された工業イベントに参加し、現地の方々とは英語とフランス語を交えながら交流し、ITERについて説明したり、世界中からのITER見学者らのガイドとしてツアーに同行したりするなど、多国籍な人々と交流することで自らの知見を広げることができた。

2020年3月からは、COVID-19の影響もあり、日本からのテレワークという形でインターンシップを継続した。日本とフランスの時差(7時間)の中で業務を行うことは簡単ではなかったが、広報部の週例ミーティングの時間をずらして、私とフランスにいる同僚双方の業務時間内にミーティングを行えるようにするなどの配慮をいただいた。テレビ会議システムを通して近況報告をしあったり、業務の確認をしたりすることで、場所をはるか遠く離れていても、円滑に業務を遂行することができた。

ITER機構での業務はもちろんだが、ITERで出会ったインターン生との思い出もたくさんある。昼食を毎日一緒に食べたり、仕事の後や週末にエクサンプロヴァンスを共に散策したりした。最初のうちは、英語を話すことにあまり自信がなく会話に入れなかったこともあったが、徐々に自分の意見をすんなりと言えるようになり、進んでみんなの輪に入ることができた。ITER機構でのインターンシップを通して様々な国籍の友達ができただけでなく、自分にとってかけがえのない財産だと思う。

ITER機構でのインターンシップという素晴らしい経験を励みに、将来、国際的な舞台で活躍できるように様々なことに挑戦し成長していきたい(図6)。

(量子科学技術研究開発機構 核融合エネルギー部門)